

獄中の作

橋本左内

二十六年夢の如く過ぐ
顧みて平昔思えば感心滋多し

天祥の大節嘗て心折す
土室猶吟ず正気の歌

【作者】橋本左内（一八三四～一八五九年）名は綱紀（つなのり）。字は伯綱（みちつな）、通称左内。宋の岳飛の人となり景仰（けいぎよう）して景岳と号した。越前藩医長綱（おさつな）の長子として天保五年三月に生まれ、医を緒方洪庵に学ぶ。一橋慶喜（ひとつばしよしのぶ）公を立てて將軍となし攘夷を断行しようと奔走したがならず、安政五年捕らえられ、翌六年十月斬刑に処された。年二十六歳。正四位を贈られる。

【語釈】*平昔…むかし 以前。 *天祥大節…宋（そう）末期の忠臣文天祥（ぶんてんしょう）の氣高い正道をふみ 行ってきたこと

*心折…心服・感服と同じ。 *心から敬い従うこと。 *土室…地下につくった室。地下室（ここのでは獄舎（ごくしゃ））

【通釈】自分のすごした二十六年の月日は、夢の内に過ぎ去って行ったが、これまでを振りかえってみると、感慨（かんがい）は計りしれない程、深く強いものだった。つねづね自分は、天文祥が節操（せつそう）をまもり正道を行っていたことに心酔（しんすい）しているのだが、今、幕府に捕らえられて、獄中にある身になってみれば、せめて天文祥が獄中で詠（よ）んだという正氣の歌を吟じて、彼の心境をしのぶのである。